シベリア諸民族の英雄叙事詩とアイヌの英雄叙事詩——類型について

萩原 眞子

はじめに

本年度の大会シンポジウムはアイヌ叙事詩の研究史にとつて画期的な課題が大会委員長によつて設定された。すなわち、アイヌの英雄叙事詩について、「一 歴史的・類型的観点から、それがユーラシアにおいて独自の発展をとげ、独自の特徴を持つものなのか、二 ユーラシアの叙事詩に共通する性格・特徴・テーマ等というものが、それをアイヌの叙事詩も共有しているのか、三 他の特定の民族の伝承と関係づけられるものなのか」というものである。このいずれの課題もアイヌの叙事詩研究には重要な意味をもっているが、ユーラシアという枠組みのなかで考察するには、まず、ユーラシアの諸民族文化のなかで英雄叙事詩とされている口承文芸について多少なりとも全体的な見通しをたてることが求められる。本稿ではユーラシアの、特に、シベリアのいくつかの民族の例を参考にしながら、アイ

ヌの英雄叙事詩ユーカラの類型について考えてみたい。

一 アイヌ叙事詩ユーカラについて

アイヌのユーカラ（もしくは、ユカラ）は金田一京助によつて「英雄叙事詩」と性格づけられ、古代ギリシャやインドの大叙事詩にも比肩するものだと、若い知里幸恵を鼓舞したことが知られている。ユーカラにはいくつか性格の異なる物語があり、金田一はその主人公と主題に基づいて始祖神のユーカラ（オイナ）、大伝、小伝、英雄のユーカラなどを区別しているが、その再録された物語の伝承地域は北海道の南西部であり、東部やサハリンの伝承については顧慮されていない。ユーカラの主人公には、アイヌラツクル、オキクルミ、アエオイナカムイとポイヤウンペが広く知られており、前三者はしばしば同一の存在とされている。

アエオイナカムイとは「われらが言い伝えるカムイ」の意で、要するに始祖神のことである。アイヌラツクルの物語は基本的に文化英雄の所業を語る神話であり、その意味でアイヌラツクルはアエオイナカムイである。オキクルミには人間界に穀物をもたらしたとする話などがあるが、オキクルミの物語が重要な位置をもっているのは神謡であり、そのなかではしばしばサマイウンクルが同伴者、トリツクスターとして登場する。このことから云えば、アイヌの叙事詩のなかでオキクルミ（とサマイウンクル）はアイヌラツク

ルとは起源を異にする文化英雄であり、その説話は異なる系統で
あると考えなくてはならないであろう。つまり、オキクルミを仮
に祖先神アエオイナとするにしても、それはアイヌラックルと同
一次元ということにはならないと思う。要するに、これまでの諸
説ではアイヌラックル、オキクルミ、アエオイナカムイがあたか
も同一の存在として説かれてきたが、説話のなかで実体(?)が
あるのはアイヌラックルとオキクルミであり、くり返しになるが、
アエオイナカムイはこの両者に対する尊称もしくは別称である。

ユーカラのもう一人の主人公ポイヤウンベはシヌタブカの幼
い城主で、この人間(超自然的な能力をもつてはいる)が登場
する物語が英雄叙事詩として理解されている。

今回のシンポジウムで議論の対象となるのはこのポイヤウン
ベ(樺太などのボンオタシユ・ツウンクル)の物語であるが、そ
の主要なテキストのまとまった出版には金田一京助『アイヌ叙
事詩 ユーカラの研究』(東洋文庫 一九三二(一九六七)、金
成まつ・金田一京助『アイヌ叙事詩 ユーカラ集I-X』(三省
堂 一九五九〜一九七五)、『アイヌ民俗文化財 ユーカラシリ
ズ』(北海道教育委員会 一九七九〜一九九六)、奥田統巳『織
田ヤエさんのユーカラ』(静内教育委員会)がある。

二 シベリアの「英雄叙事詩」―タームの問題

アイヌのユーカラを「英雄叙事詩」と称することには、今日

ではあまり違和感はなさそうに思われるが、この語はわが国の
口承文芸ではなお成員権を与えられているとはいえない。その
ことはシベリアの少数民族の叙事詩についても同じ状況である。
サハリンのニヅフで記録されている叙事詩やアムール川流域の
ウリチヤナナイなどでのメルゲンとブジの物語などは、英雄
叙事詩に値するのかどうか、研究者によって見解は異なる。こ
のことは、エヴェンキのニムンガカン英雄説話(казание
gpi)とするのか、英雄叙事詩(эпос)とするのかについての
議論にたいへんよく反映されている。

エヴェンキはシベリアでもっとも広範な地域に分布する少数
民族(人口約三万五千人 二〇〇二年)で、東はサハリン・ア
ムール川地域から西はエニセイ川東岸の支流域に及ぶ。この
広範な地域の各地で蒐集された口承文芸の資料集は『エヴェン
キ(トウングース)フォークロア資料』(一九三六年)⁽³⁾が最初
の出版であるが、その編者のM. ヴァシーレヴィチはこれには
テュルク・モンゴルの英雄叙事詩に比肩できるような「エポ
ス」はないとしている。この見解は基本的に『エヴェンキの
歴史のフォークロア』⁽⁴⁾(一九六六年)でも変わらなかった。⁽⁵⁾エ
ヴェンキの居住が広範な地域に及んでいることから、各地の
エヴェンキには言語だけでなく文化的な地域差がある。具体
的には、長大な叙事詩は西方のエニセイ川流域のエヴェンキで
は知られておらず、それが盛んなのは東方のグループにおい
てである。その東方であるヤクーチヤで採録されたテキスト三

篇が『ヤクーチヤのエヴェンキのフォークロア』(一九七一年)で公になった。この中には著名な詠い手 *Н.К.Торофийермоф* (一九一五—一九七一年) による「イルキスモンジャ勇者」〔荻原 二〇〇二〕と題する物語がある。同じ伝承者のテキストがさらに二篇『エヴェンキの英雄説話』(一九九〇年)⁽⁷⁾に収録された。後者三篇は堂々とした英雄叙事詩と思われるが、書名が示すとおり、編者である *А.Н.Муилер* エヴァは先学に倣ってこれをエポスとはしていない。

ソ連・ロシアの学会では、*skazanie* (英雄説話) と *epos* (英雄叙事詩) の概念について論者間で区々議論や見解の相違があるが〔例 *Жирмунский* 一九六二 序文〕、中央ユーラシアやギリシヤ、インドの大叙事詩を視野にいたした議論のなかでは、確かに、シベリアの先住民の叙事詩はそれらと同列に扱うことはできない。エヴェンキの研究者が *skazanie* と称するには、それなりの理由があるのだと思われる。

このように、エヴェンキの英雄譚を英雄説話とするか、テュルク・モンゴルの英雄叙事詩に並ぶエポスとするかについては議論のあるところで、それはエポスの成立に関する大問題に違いない。

その問題に踏み込むことなく本稿の課題に向きあう上で有効であると考えられるのは、シベリアの諸民族が自らの言語文化である口承文芸にどのようなジャンルを設けているかという民俗語彙である。すなわち、一般に口承文芸には二つ(例外的に

は三つ)の区分がなされ、私見ではその特徴は「詠われる説話」と「語られる説話」として理解される。アイヌ語のユーカーは前者、ウエベケルは後者である。同様にアムールランドの諸族でも、このような二分法が確認できる〔荻原 二〇一三〕。エヴェンキの場合には、ニムンガカン／ニムガカンは「詠われる説話」、ウルグルが「語られる説話」に対応する。このことから、エヴェンキに伝承されてきた英雄の説話を研究者がどのように性格づけるかということをして、本稿では「詠われる説話」の叙事詩を便宜的に英雄叙事詩として論を進めることとし、その上で、歴史的・社会経済的な観点から、その類型を考へることが生産的であると考える。

三 シベリアの英雄叙事詩の歴史・社会・経済的背景―類型について

中央ユーラシアやシベリア諸民族の口承文芸については、ソヴィエト・ロシアの研究者たちがそれぞれ研究対象とする民族の叙事詩の類型(タイポロジー)を論じている。広く口承文芸研究という立場からは、*V.Ya.ブロップ*、*V.M.ジルムンスキー*、*E.M.メレチンスキー*、*B.N.プチャーロフ*などによって、叙事詩のタイポロジーをもとに、その起原・継承・成立について論じられている。その議論の拠るところは基本的には社会経済発展段階、すなわち、唯物史観である。そして今日まで、シベリアの叙事詩研究では多かれ少なかれその議論に照らして各民族の叙

事詩が検討されてきている⁽⁸⁾。

一般的には古代的叙事詩 (archaic epos)、古典的叙事詩 (classic epos)、英雄叙事詩 (heroic epos) が区分されるが、この区分には境界があるわけではない。つまり、その議論のなかでは、神話、神話的叙事詩、魔法昔話、英雄昔話 (heroic skazka)、英雄説話 (skazanie)、英雄叙事詩 (epos) などの語が使われ、大まかにいえば、各民族の英雄叙事詩が神話や神話的な説話、氏族・民族起原の伝承をひき継ぎながら、氏族・部族などの接触・抗争、異民族との戦争などの歴史的事実を背景にして成立してきたことが説かれている⁽⁹⁾。このような議論を踏まえながら、多くの研究者たちはそれぞれが研究対象とする民族の英雄叙事詩の成立について個別に論じている。以下にいくつかの例を挙げよう。

(イ) エヴェンキのニムンガカンの主題

エヴェンキ語では既述のように、口承文芸にニムンガカン／ニムガカンとウルグルという二つのジャンルがあり、英雄叙事詩は神話とともに前者に区別される。そしてニムンガカンでは、最初の人間である主人公・英雄は孤独な存在として語られる。この最初の人間がどのようにしてこの地上に登場したのかについては、天神や火などの神霊によって説明される。次いで孤独な主人公（一人だけの孤独という場合、きょうだいだけで孤独という場合もある）の遠征・冒険が語られるが、その動機や目的は世界を見聞して自己の存在を認識しようとするとか、他人

の存在の有無を確かめるためでもあり、また、力競べ、闘いで稼を獲得するという場合もある [Bajimova 2002:5499]。

一方、ヤクーチヤやそれに近接する東シベリアのエヴェンキの英雄叙事詩ニムンガカンには、サハのオロンホの影響が明らかである。物語の舞台は天界・中界・地下界の三界世界であり、ここでは主人公の英雄・勇者（マタ）が地下界の魔物アヴァヒと対決して、壮絶な闘いをくりかえす。その理由は掠奪された姉妹の救出である。また、勇者が自らの嫁を求めて遠征する妻覓も主要なテーマであり、花嫁を伴って帰郷すると盛大な祝宴が開かれる。そして、その場から次の勇者が花嫁を求めて遠征に出立するというように、話は連鎖的につづく場合がある。また、東シベリアのエヴェンキでは主人公・勇者には氏族の始祖もしくは文化英雄としての特徴が明らかであることも重要な特徴である [萩原 一九九七、二〇〇一]。

(ロ) アルタイの英雄叙事詩カイについて

アルタイは南シベリアのアルタイ共和国の主要民族（人口六万七千人 二〇〇二年）で、言語はテュルク語族に属する。民族学や言語学では南北の区分がなされ、南アルタイのグループにはアルタイ・キジ、テレンギト、テレウト諸族、北アルタイのグループにはクマンジン、トゥバルル、チエルカン諸族がある。このような地域・エスニックグループなどの別はあるものの、『アルタイの英雄叙事詩』の著者の S. スラザーコフは文化的には全体

として共通性を指摘することができるとしている。

そのなかでは、(1) 氏族制時代の叙事詩、(2) 初期封建制時代の叙事詩、(3) 父権的封建制時代の叙事詩を区分されている。この三分の叙事詩のそれぞれにいくつかの主題が取りあげられている。すなわち、(1) 英雄と怪物との闘い、英雄と地下世界の住人との闘い、英雄の結婚、家族と氏族関係、襲来者との闘い、(2) オルホン碑文とアルタイ叙事詩、征服者・ハーン(汗)との戦いの英雄説話、(3) 反封建制のモチーフ、歴史的テーマ、習俗をテーマとする説話などである【Cyparkov 1985: 目次】。

スラザーコフの基本的な考えによると、アルタイの古代の諸族では怪物との闘いやその他の偉業をなし遂げる宇宙起源の巨人英雄の神話や伝説は英雄叙事詩に先行するものであり、「神話は叙事詩(эпос)ではなく」という。つまり、「エポスは勇者の手柄を物語るうたとして生まれた。エポスにはさまざまな神話の主題や形象のなごりがあるが、エポスは最初から別なる英雄を生み出した。それは狩人勇者(メルゲン)、次には騎馬の戦士勇者(バータル)である。馬のない勇者は勇者ではない、勇者というのは馬に乗る者である」という【Cyparkov 1985: 26】。そして、馬飼養という経済活動が新たな経済・社会制度への転換を促し、母系氏族から父系氏族制へ移行し、英雄と英雄叙事詩成立の基となったとする。この社会のなかでは狩猟は父系的な家族・氏族にとって主要な経済活動の一環であり、「アーカイック叙事詩」では英雄は絶えず狩にでかけ、馬に乗って鹿を

追い、馬の背から矢を放ち、獲物を馬の背に積み上げる。叙事詩のなかではこうした狩人勇者はメルゲンと呼ばれる。しかしながら、そのなかでは馬はまだそれほど重要視されてはいない。

馬飼養は古代の氏族や部族生活に大きな変化をもたらした。つまり、馬を放牧するために氏族・部族集団の大きかりな移動が生じ、それは軍事的な衝突や襲撃を伴うことになる。こうして銅や青銅ではなく鉄の矢尻や槍、太刀など新たな武器が作られるようになり、戦士集団が組織され、それを統率する首領(ハーン)が生まれることになる。こうして、勇者が戦士になるのは、自分の馬をもつ、すなわち、若者のイニシエーション儀礼で馬を授けられてからであるという【Cyparkov 1985 : 26—30】¹⁰⁾。

この考え方はアルタイばかりでなく、中央ユーラシアの英雄叙事詩の成立について部分的には説得的である。乾燥・半乾燥地域である中央ユーラシア(アジア)のテュルク・モンゴル諸族では、馬匹文化を核とする遊牧畜畜の世界であった。そこに戦士集団を率いる首領・英雄の戦いを詠う英雄叙事詩が盛行し、叙事詩のなかでは英雄・勇者と共に馬は格別な役割を担う重要な存在となっている。

(八) サハ(ヤクート)の英雄叙事詩オロンホ

サハは東シベリアのレナ川中流域に分布するテュルク語系の民族(人口 四四万四千人二〇〇二年)である。かつての居住地は南シベリアにあったが、そこはテュルク・モンゴル諸族の

原郷地とされている。テュルク語系諸族は南シベリア（アルタイもその一つ）から中央ユーラシア一帯に拡がり、さらには、南ロシアのボルガ川流域までの広大な地域に居住している。その地域のカザフ、ウズベク、キルギス、カラカルパクなどでは長大な英雄叙事詩が知られている。サハの英雄叙事詩はこのような民族と起源的に深くかわりがあるとみられ、英雄叙事詩についても共通するところが少なくない。

オロンホでは、「古代の勇者、氏族の首領、地上の部族（アイ・アイマク）と地上の人間（ウラーンハイ・サハ）の守護者たちの偉業がうたわれ、……勇者たちは地下界や天上界の悪なる魔物アバーシと闘って、平穏な生活、氏族や部族の安泰な存続を図ろうとする」[Емельянов 1980: 4]。オロンホの体系的な研究者であるエメリヤノフはオロンホのテーマを（1）地上世界の居住、（2）ウラーンハイ・サハ族の始祖、（3）アイイ族とウラーンハイ・サハの守護者に大別し、それぞれにまたサブグループを設けているが、その内容は非常に多岐にわたっている。

地上の部族アイイ・アイマクとは天神アイイに由来する地上の住者を指し、ウラーンハイ・サハは南シベリアから今日のレナ川流域に移住してきたサハ人の祖先のことである。つまり、前者は起原神話、後者は歴史伝承に由来する名称である。（1）地上世界の居住についてのオロンホには二通りの話がある。その一つでは天神ユルング・アイイ・トヨンが自らの子供を地上に住まわせ、その息子と娘から地上のウラーンハイ・サハが生

まれたとする。もう一つの話では、中界に降下したのは何かの過ちを犯した罰として天界から追放された天神の子である。天神はそのアイイの子孫たちを天上界に戻し、地上には主霊ぬしをおき、それに人間を守護するためのさまざまな役割を付与したとする。（2）ウラーンハイ・サハの氏族の首領としては、①孤独な男、②ウラーンハイ・サハ族の氏族長、③部族の首領とその息子たち、④その他が挙げられている。孤独な主人公とは、すなわち、地上世界の最初の間人 $\equiv$ エル・ソゴトフ（たった一人の人間の意）やエレイデーフ・ブルイダーフ（苦勞多き人の意）のことで、地上に生活の手段をもうける文化英雄的な役割を果たす話、地下世界の魔物と闘って掠われた嫁や女性たちをとりもどす話など、その役割は基本的には人間の生活の諸側面にかわっている。

（3）のグループは、アイイ・アイマクとウラーンハイ・サハを襲撃する地下世界や上界の魔物アバーシから民を守護する話である。登場する守護者は、①地上世界に生まれ育った勇者、②天界から地上に降下した勇者、③女勇者である。地上に生まれた勇者は多くの場合奇跡的な誕生をした子供か薄倅な年下の兄弟である。また、強力な守護者であるニユルグン勇者は最高神たちの采配によってアイイ・アイマクを救助するために上界から地上界に降下してくる [Емельянов 1980: 5-11]。

要するに、サハのオロンホは天界・地上界・地下界という世界のなかでの、天界と地上界の住人対地下界の魔物アバーシ

との抗争・戦いが一貫したテーマであるように見える。しかも、この三界構造は天界にもあり、天界の地下界はアバーシーの世界である。そして、登場するヒロインはしばしば強力なシヤマンであることも大きな特徴である。

(二) アムールランドの英雄叙事詩

VYa.ブロッツ『口承文芸と現実』(一九七六年)に「チュクチ神話とギリヤク叙事詩 Gos」(初出は一九四五年)と題する覚え書きのような小論がある。チュクチは北東シベリア、ギリヤクはサハリン・アムール川下流域の民族である。その趣旨は「エポスの基本的な構造はシヤマンの神話を基盤とするチュクチの説話にある。¹⁾これに対して、エポスの萌芽的な段階はニヴフ(ギリヤク)の叙事詩ナストウンドに見られる。これを神話と比較した場合の本質的な違いは、「魔法の才、護符、援助者がなくなり、英雄は自力、強靱な体力、勇気と大胆さをもって行動する。この決定的な手柄から、英雄叙事詩の創造とヒロイズムの新たな観念が導かれる。英雄となるのは人間である」としてゐる [Прощ 1976: 300-301]。(ニヴフの叙事詩ナストウンドは一九〇八年出版の L.シュテルンベルグの資料集に拠る [Итернберг 1908: 参照 萩原 一九八九年]。

このような人間がどのような歴史的・社会経済的な背景で生まれてきたのであろうか。それについて具体的なヒントを与えてくれるのは、Zh.K.レーベジェヴァによる北方諸民族の叙事

詩の比較研究である [Левцева 1981]。ここでは東シベリアのエヴェン(言語上はエヴェンキに近縁であるが、その分布はオホーツク海寄りからさらに北方である)の叙事詩を中心に、エヴェンキ、アムールランドの諸民族、西シベリアのネネットのテキストを取りあげて、一般に共通する次のようなテーマを抽出している。すなわち、①男と別に暮らす女、②女シヤマン、③ヒロインの成人、④ヒロインの婚捜し、⑤女勇者の復讐、⑥若い勇者の成人、⑦勇者の復讐、⑧嫁の獲得、⑨氏族間抗争・部族戦争である。ここには神話的な要素はみられない。

この前半①～④の主人公は女勇者・ヒロイン、後半⑤～⑦は男性の英雄・勇者である。アーカイック、すなわち、古代叙事詩に女性の勇者を位置づけるこの議論には、明らかにその根底に母系社会が想定されているが、そのことはここでは措くとして、シベリアの英雄叙事詩には女性の勇者・戦士、狩人などが登場する例は少なくない。²⁾後半⑤～⑦の男性の勇者の活躍の場面は女性の場合と基本的に重なる。ただ、異なるのは⑧氏族間抗争・部族戦争という新たな社会環境である。言いかえれば、それは社会経済制度の現実的な変化の暗示といえよう。例えば、北方のトナカイ飼養民の社会では放牧地をめぐる摩擦や畜群の略奪などがあり、そこから氏族同士や異民族の間の戦争が引きおこされる。それとは異なり、アムールランドの諸民族では清朝下における交易活動の盛行によって生じた地域間や集落間の格差や摩擦の影響が想定されなくもない。

上述のアーカイック叙事詩や古典的叙事詩に神話的な叙事詩と現世の「人」を主人公とする叙事詩を分別することができるとするなら、アムールランドの英雄叙事詩は、現世の「人」、それも「大人」の例である。そして、主人公は男性も女性も狩りによって生活し、外出するきっかけは狩りである。展開する話のなかにはしばしばシャマンが登場し、また、女性たちが鳥に変身して霊的な存在として主人公を助けるモチーフは顕著な特徴である。

他方、このような話と共に、アムールランドの英雄叙事詩（*ngma,ningma,ningunan,nimapu,nimanku*）には孤独な主人公の話がある。その孤独な主人公とは、村落間の争いにより両親や家族が滅ぼされるか、掠奪の後にとり残された孤児である。争いの原因は具体的には語られないが、それは現実に繰りかえされてきた地域間、村落間の争い、襲撃などの歴史的事実を反映していると思われる。偶々死を免れた主人公は偶然に両親やきょうだいの消息を知り、遠征にでかけ仇敵を討ち、囚われた一族と村びとを救出して村を再興する。

アムールランドの英雄叙事詩では主人公は固有の名を持たないか、もしくはメルゲン（それに類するメルゴ、マルゴなど）として登場する。メルゲンとは弓の名射手の意で、この語は先に触れたように広くアルタイでも、また、モンゴルの叙事詩にも共通する。この点ではアムールランドの英雄叙事詩は類型として「狩猟民の英雄叙事詩」と

いうことができよう。

四 アイヌの英雄叙事詩・ポイヤウンベのユーカラ

以上、シベリアのいくつかの民族の英雄叙事詩について、その概要をみてきたが、全般にわたって類型を整理して多少なりとも体系化するためには、まだ多くの問題について議論を経なければならぬと思う。ここではごく概略的にアイヌのユーカラがどのような民族のそれに近似するものかどうか、考えてみることにしよう。

いわゆる神話的叙事詩と人間の叙事詩という観点からするなら、アイヌラックルを主人公とするユーカラは、始祖神もしくは文化英雄の神話的叙事詩として、シベリアの諸多の民族にも共通するアーカイックないしは古典的叙事詩とみなすことができよう〔荻原 一九九四一〕¹³⁾。

一方、ポイヤウンベを主人公とするユーカラにはさまざまなヴァリエーションがあり、古くに採録出版されたテキストはかなり特異なプロットを含んでいることがある¹⁴⁾。日高地方の伝承者ワカルバ翁や幌別の金成マツから採録された代表的なテキストでは、ポイヤウンベはシヌスタブカの幼い城主という設定である。この勇者としての戦いの相手は近郷の首領たちの連合である。その敵対者にとつての戦いの目的はシヌスタブカ城に集積されている財宝の争奪であるらしいが、ポイヤウンベが戦いに馳せ散じるのは

敵対者の追撃であり、また、時には味方になる乙女の救出である。ポイヤウンベが敵対者を滅ぼして、相手方の財宝や民をものにして、凱旋したという話ではない。しかも、この城主には治める村や守るべき社会集団があるようではなく、せいぜい姻戚関係にある首領の村と地縁的な連合があるぐらいである。

このように主題については、アイヌラツクルのユーカラとポイヤウンベのユーカラとは異なる範疇に属するが、口承文芸としての形式には明らかに共通性があると言えよう。

さて、シベリア諸民族に見られる現世の人間英雄の物語は、その背景に氏族や部族などの社会組織があり、主人公にはその社会集団の長としての役割が明らかである。また、アムールランドの英雄叙事詩では主人公の勇者は掠奪された家族や村びとを救済し、そして村を再興したという結末が語られる。それに比して、ポイヤウンベにはそのような社会的な背景や役割が明らかでないばかりか、戦いに出席する目的が必ずしも定かでない。また、アムールランドの英雄叙事詩では主人公が狩人であった、狩の装備をもって（女性の場合にも）狩りにでかけるところから語られる。それに対して、ポイヤウンベが狩りに出かけるのは、狩人としてではない。そのきっかけは養育者の女性によって与えられるが、狩りの本当の目的は鹿肉ではなく、その意図は別にあることになっている。このように見るなら、ポイヤウンベを主人公とするユーカラでは、この少年英雄は確かにトミサンベツ・シヌタブカの城主ということになってはいるが、

そのほとんど静的な日常生活からは首領としての社会経済的な役割は一向に窺いしれない。こうしてみると、英雄叙事詩としてのポイヤウンベのユーカラがユーラシアのどのような英雄叙事詩に近似するのか、どのような類型に含めることができるのかは、断定し難い。言いかえるなら、類型という点では、ユーラシアの英雄叙事詩のなかに比較対照を見いだすことが難しい、きわめてユニークな例であると言わざるをえない。ただし、叙事詩の構成、叙述や表現など詩学的な特徴については、ユーラシアの英雄叙事詩一般に共通するところが多々あることは明らかであり「荻原 二〇一六 表参照」、この方面からのアプローチには比較検討の余地があるものと思う。

注

(1) ユーカラには「英雄詞曲」とする考えもあるが、広く諸多の例を含めて比較する上では、便宜的に「英雄叙事詩」とするほうが望ましい。

(2) 金田一によるオイナ（聖伝）、大伝、小伝は各テキストの物語の内容に照らして付されたもので、いずれもその主人公はアイヌラツクルである。オイナはアイヌラツクルの神話、大伝はアイヌラツクルが魔神に奪われた太陽の女神を救出する物語、小伝は羽衣説話のモチーフのあるアイヌラツクルの恋愛婚姻譚である。アイヌの叙事詩一般論としては、いずれもアイヌラツクル神話サイクルとみることができるとは、

- (3) Васильевич Г.М. (сост.) *Материалы по эвенкийскому (тунгусскому) фольклору*. Д.
- (4) Васильевич Г.М. *Исторический фольклор эвенков. Сказания и предания*. М.-Д. 1966
- (5) ただし、その説明として、東部エウエンキの英雄説話は「古代トウングースが南ザバイカリーエ（バイカル湖東部）地域から東へ分散したある段階、紀元六世紀以前を反映している。このことは住居（アイグル）の記述と狩人たちの敵対者の所在が西（オノン川の西）にあるということに拠る」としている【*Исторический фольклор эвенков*:15】。これに対して、I.V.Pukhov は東部エウエンキのニムンガカンとヤクートのオロンホに共通する特徴が古代に由来すると共に、接触による影響を認めている【*Эвенкийские героические сказания*:75】。
- (6) Романова А.В., Мырсева А.Н. *Фольклор эвенков Якутии*. Д. 1971
- (7) *Эвенкийские героические сказания*. Новосибирск. 1990 (“Памятники фольклора народов Сибири и Дальнего Востока”)
- (8) 日本における英雄叙事詩についての歴史的な議論は三浦佑之「古代日本列島の英雄叙事詩」『叙事詩の学際的研究』（研究代表者 三浦佑之 平成9～12年度 科学研究費補助金研究成果報告）二二三頁に詳しい。
- (9) この議論は原始共産制、母系氏族社会から父系氏族社会、部族社会・封建制を念頭に進められてきたと言えよう。英雄叙事詩の成立条件が階層化した社会である封建社会や民族国家にあるとする考えは、ロシアの学会ばかりではない。広く世界の神話に造詣の深い松村一男は英雄叙事詩に関連して、神話的叙事詩は「どのような人間社会でも存在するカテゴリーではない。それは王がいて、英雄がいて、戦士団がいるような社会でのみ存在しうる。……戦闘を神話的叙事詩とするのは一定の発達した階層化社会においてのみなのである」としている【松村 二〇一三 七一頁】。この論では、神話的叙事詩がそれとして階層化社会に独立に生れたということになりはしないであろうか。神話的叙事詩についてもシベリアの口承文芸は有効な考察の手がかりを与えてくれると思われる。
- (10) こうした特徴はモンゴルの英雄叙事詩「ジャンガル」にも共通する。
- (11) 英雄叙事詩の起源をシャマニズム、つまり、シャマンの伝承に求める考え方は学説史の上では根強くある。例えば、エヴェンキ語の英雄叙事詩ニムンガカン (*nimngakan*) はシャマンを意味するニムンガカラン (*nimngakalan*) と同根である。そしてこの語はまた語り部を表す。【*Варламова 2012*: 109】
- (12) シベリアばかりでなく、叙事詩のなかで女性がヒロイン・勇者・戦士・シャマンなどとして登場する例は中央ユーラ

シアからヨーロッパにまで認められる。「萩原 二〇〇五」
(13) アイヌラックルの一篇「ポロオイナ異伝Ⅳ」(『ユーカラ集
Ⅱ』)には羽衣神話のモチーフがある。

(14) ポイヤウンペが養育者のもとで庇護されているという場合
ばかりでなく、例外的には幼いきょうだいを扶養している
とか、性悪な伯父のもとで惨めな生活を余儀なくされてい
るという話もある。

参考文献

池上二良

二〇〇四『ツングース・満州諸語資料訳解』北海道大学図書
刊行会

萩原眞子

一九八九「ニヴヒの英雄説話」『民族接触―北の視点から―』
六興出版 一八八―二四一頁
一九九四―「オイナの神話―「巫者」論に寄せて」『アイ
ヌ語の集い―知里貞志保を継ぐ』北海道出版企画センター
四九―七二頁

一九九四―「メルゲンとプジの物語―ナーナイの英雄叙事
詩」『口承文芸研究』第一七号

一九九七(資料)エヴェンキの英雄説話の2つのテキスト」

『北海道北方民族博物館研究紀要』第六号

二〇〇一「エヴェンキの英雄叙事詩『イルキスモンジャヤ

者』(萩原眞子(編)『ユーラシア諸民族の叙事詩研究
(1)―テキストの梗概と解説―』(研究プロジェクト報告)
千葉大学大学院社会文化科学研究科 八四―一二二頁

二〇〇五「競う花嫁・女勇者・シヤマン―ユーラシアの英雄
叙事詩に共通するヒロイン像」(吉田敦彦監修)『比較神話
学の鳥瞰図』大和書房 一七五―二〇四頁

二〇〇九―「神話的宇宙と英雄の世界―アイヌ叙事詩につ
いてユーラシアの叙事詩研究からの覚え書」(篠田知和基編)
『天空の世界神話』八坂書房 二二七―二三八頁

二〇〇九―「神話・英雄叙事詩における天界と天界びと―
シベリアのサハ(ヤクト)の口承文芸から―」『アジア遊
学』一二一、五一―五七頁

二〇一―「英雄はおさな子―英雄叙事詩における神話につ
いて」『説話・伝承学』一九号、一―二〇頁

二〇一三「ユーラシア口承文芸の二つの様態」『千葉大学
ユーラシア言語文化論集』第一五号、一―九頁

二〇一六「ユーラシアの英雄叙事詩研究の方法をめぐって―
テュルク・モンゴルの比較研究の試みから」『口承文芸研究』
第三九号、一三―一四五頁

風間伸次郎

二〇一〇「ツングース諸民族の口承文芸について」『北海道立
北方民族博物館研究紀要』第二〇号、二五―五四頁

津曲敏郎監修・序(佐藤千代演唱、池上二良採録・解説、山田

祥子編訳、E.ビビコワ露訳)

二〇一四 『ウイルトタ長編英雄物語ニグマー・シーグーニ物語
テキスト』北海道大学大学院文学研究科

松村一男

二〇一三 「英雄神話の諸相」(篠田知和基編) 『神話・象徴・

図像 Ⅲ』楽蔭書院：六七—八〇頁

Варламова Г.И.

2002 *Эпические и обрядовые жанры эвенкийского
фольклора*. Новосибирск

Васильев Г.М.

1966 *Исторический фольклор эвенков — сказания и
предания*. М.-Л.

Емельянов Н.В.

1980 *Сюжеты якутских олонхо*. Москва

1983 *Сюжеты ранних тшюв якутских олонхо*. Москва

2000 *Сюжеты олонхо о защитниках племени*. Новоси-
бирск

Жирмунский В.М.

1962 *Тюркский героический эпос*. М.-Л.

Кузьмина Е.Н.

2005 *Указатель тшювских мест героического эпоса
народов Сибири (Алтайцев, Бураят, Тувинцев, Хакасов,
Шорцев, Якутов)*. Новосибирск

Дебелева Ж.К.

1981 *Архаический эпос эвенков*. Новосибирск

1982 *Эпические памятники народов Крайнего Севера*.

Новосибирск

Мелетинский Е.

1963 *Происхождение героического эпоса*. М.

Мырзева А.Н.

1990 *Эвенкийские героические сказания*. Новосибирск.
("Памятники фольклора народов Сибири и Дальнего
Востока")

Востока")

Пропп В.Я.

1976 *Фольклор и действительность*. Москва (斎藤君子
訳 『口承文学と現実』三弥井書店 1978)

Пухов И.В.

1975 *Героический эпос тюрко-монгольских народов
Сибири*. Общность, сходства, различия. (Галак В.М.
ред.) *Типология народного эпоса*. Москва :12-63

реда.) *Типология народного эпоса*. Москва :12-63

Суразаков С.С.

1985 *Алтайский героический эпос*. Москва

Штернберг Л.Я.

1908 *Материалы по изучению гильдяцкого языка и
фольклора*. СПб
(おぢはら・しんらん／千葉大学)